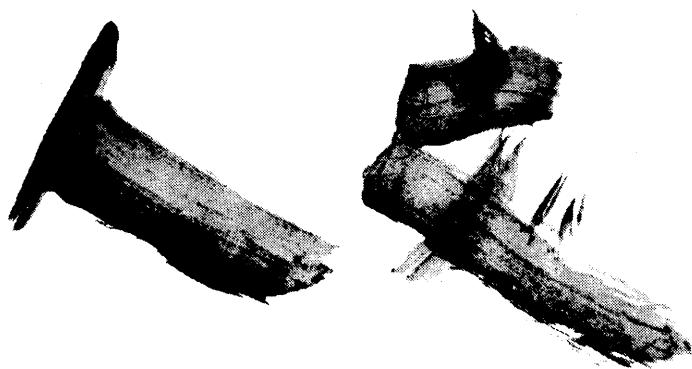




第四号



1995

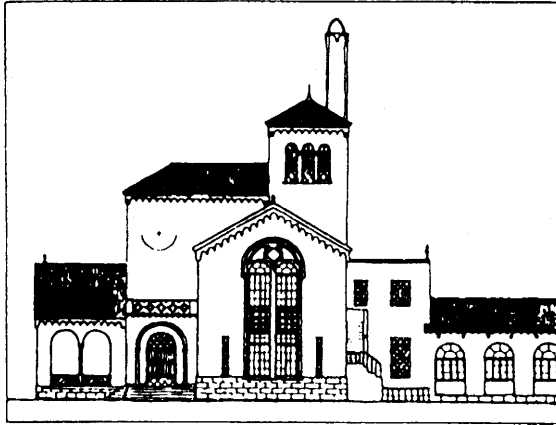
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X

人 文 第四一号

1994年1月—1994年12月

も く じ



随想

「動くもの」と「動かざるもの」

人文を離れて一年

阪神大震災に思う

講演

夏期講座

会話のトピックはいかにつくられていくか(串田)／禅問答

(吉川)／笑いの本地・笑いの本願(谷)／フィクションとはなにか(大浦)

開所記念講演

ミメシスの政治学―『啓蒙の弁証法』の思想圏―(上野)

／貝原益軒―内向きの宇宙―(横山)／『世説新語』の美学―才から情へ―(小南)

退官記念講演

近代日本の「満州」認識(古屋)

巻報

おくりもの(20)人のうごき(20)外国人研究員(22)

招聘外国人学者(22)外国人研修員(23)外国人研究生(23)

東洋学文献センター講習会(24)お客さま(26)

共同研究の話題

「大東亜共栄圏」研究のむつかしさ

人口膨張と都市化率

組織化の実相

所のうち・そと

パプの昼食

南インドの写本調査から

人文倶楽部の誕生

書いたもの一覧

おもしろく読んだ本

小野 和子
藤井 譲治

リチャード・ルビンジャー

9 9

14

18

20

28

32

40 50

「動くもの」と「動かざるもの」

小野 和子

昨年の秋、百万辺の古本市でたまたま「昭和二十九年 京都大学職員録」を見つけた。この年の春、私は文学部を卒業して研究所に助手として採用されたばかりだった。そこには既然大助手だった吉田光邦氏や岡崎敬氏などとともに、上田和子という私の名前もたしかに並んでいて、買い求めはしなかったものの、なつかしい気持ちになった。当時はまだ、旧制大学の卒業生がいたため、新制の学部卒にも助手試験の受験が認められていたのである。私は多分、東方形で採用された最初の公募による助手ではなかったか、と思う。

私の属したのは、安部健夫先生の主宰された『雍正硃批諭旨』の研究班であった。これは、この五年前、つまり一九四九年、中華人民共和国の誕生した年に発足した研究班であった。雍正年間といえば、これからさらに二〇〇年以上も時代をさかのぼる。革命中国の誕生を目の前にしながら、その中国のなかに「中心的なもの」と「周辺的なもの」、「動くもの」と「動かざるもの」を見分けつつ、むしろ中国の過去の歴史を通して、今



日の中国を理解しようというのが、ねらいであつたらしい。しかし、今にして考えれば、安部先生は中国の「中心的なもの」はいまだ「動かざるもの」としてある、と考えられていて、中国の伝統的な官僚システムや社会経済の仕組みを説明する必要を感じておられたのではなかったか、と思う。最近の中国に、いまなお複雑な文書システムが存在し、収、送、呈、批、擬、抄など、いくつもの文書処理の方法があることを申し上げれば、「ね、君、そうだろ」とおっしゃる安部先生の温顔が見えてきそうな気がする。

しかし、いっぽう、当然のことながら「動くもの」への関心も強烈であつた。天野元之助先生の研究室に、小野川秀美先生や里井彦七郎氏らが集まって、革命史として中国の近代史を勉強しようという小さな研究会が始まつたのも、私が研究所に入つた年であつた。さらに一九五八年には、小野川秀美先生と健康を回復された島田虔次先生が中心になられて、再版されたばかりの『民報』（中国同盟会の機関誌）を会読する会が生まれた。まだ、近代史が東洋史では市民権を得ていなかった時代のことであつて、この研究会は、研究報告をもまじえつつ、その後七八年、歴史研究室のプライベートな研究会として続けられた（高橋和巳氏も一時期これに参加されていて、「辛亥革命と文学革命」と題した氏の報告の手書きのレジュメが三枚私の手許に残っている）。そして、一九六六年ようやく正式の辛亥革命研究班になつたのであるが、私は、この研究会を通じて、私のテ-



マとしていた明末清初がやがていきついた近代から、もう一度その時代を逆照射する視座を与えられた。また、この研究会で、辛亥革命時期の革命家秋瑾女士について研究報告をしたことが、私の女性史研究の出発点ともなった。女性だからといって女性史をやることはしたくない、と肩肘張って出発した私だったが、この時には、女性史に関わることにほとんど抵抗はなかった。振り返ってみれば、いつも駆け足で走ってきたような慌ただしい研究生活であった。定年を迎えたとはいえ、当面は、これまでのしごとのまとめで相変わらずの生活が続くことになりそうである。



人文を離れて一年

藤井讓治

昨年四月、十一年住まわせていただいた研究所を離れ、文学部に居を移しました。「改革」という嵐のなか、あつというまの一年でした。

研究所での十一年はと、振り返りますと長かったようでもあり、また短かったようでもあります。古屋班・飛鳥井班・佐々木班・横山班、そして西洋部の中村班など、いくつかの研究班に参加し、これまでの自分の専門とは違った世界でさまざまなことを学ばせていただきました。

最後の四年は、通称「居所」班を主催いたしました。「居所」班の正式名称は、「近世前期における政治的主要人物の居所と行動」というものです。研究所での共同研究の名称としては、桑原先生が組織された「アジアとヨーロッパにおける革命の比較研究」を超える長大なタイトルです。

この研究班を組織したときの私の気持ちは、学部や他の研究機関ではできないものをやってみようというものでした。しかし、それが研究成果といえるものとなるかが、はなはだ心配で



した。その理由は、この共同研究の内容が、將軍や京都所司代といった江戸時代前期の主要人物がいつどこに居たかを明らかにしようとするもので、それ自身で何かを主張する、といったものではなかったからです。しかし、意気込みもありました。自分も含めて多くの研究者が、研究の過程で繰り返し繰り返し行ってきたにもかかわらず、学界共有のものとはならなかった基礎的作業を集成し、研究者共有のものとしてしようと考えていました。こうした仕事は、研究所でしかできないと思っていたからです。

昨年の三月末に、名を少し縮め『近世前期政治的主要人物の居所と行動』を研究所の調査報告の一冊として刊行することができました。研究者を中心にお送りしたところ、多くの方から「個人ではなかなかできないことを」とか「早速使わせてもらっています」などと、御返事をいただきました。そこで、より多くの人が利用できるようにと、内容をさらに充実して市販してはと思い、出版社の人に相談しましたが、反応はあまり芳しくなく、少しばかり意気消沈しておりました。しかし、ここにきてどこで聞かれたのか、いろんな人から『近世前期政治的主要人物の居所と行動』をぜひ欲しいといってこられるようになり、すこし息を吹きかえしております。と同時にこうした仕事は、研究所という場がなくてはできなかったと、しみじみ思っております。



阪神大震災に思う

リチャード・ルビンジャー

多くの外国人にとって、日本は強力で効果的な中央集権化が行われているというイメージがある。とくにそれは、中央政府のリーダーシップやコーディネーションが強く発揮される国際ビジネス（通産省）や教育（文部省）の分野において顕著である。しかし、今般の阪神大震災の後で生じた諸々の事柄に接したとき、これまでいっていたイメージと現実の間には、大きなギャップがあることに気付かされた。分野によっては、国の統制は末端まで十分に及んでいないようである。

数年前に起こったサンフランシスコ地震から、地方行政は大きな災害に対して無力であり、中央政府の組織のみが、多くの緊急活動のグループをコーディネートでき、かつまた多大な物質的援助を提供することが可能であるとの教訓を多くの人々が得た。ところが、地震国の日本に、このような集権的な組織が存在するように見えないのは驚くべきことである。多くの人命の喪失および施設や家屋の壊滅から、私が受けたショックの大きさはいうまでもないが、さらに大きなショックは、事後しば



らくの間被災者は文字どおり放置され、彼らを励ましたり援助を約束する役人や政治家の姿がほとんど見られなかったことである。なぜサンフランシスコ地震の教訓がここで生かされなかったのだろうか。

一方、身内や家財を失い、劣悪な環境下の避難所に収容された被災者の方々の秩序ある行動と忍耐力には、大変感銘を受けた。財産一切を失い、小学校に避難したある婦人は、「何が必要か。」とのTVのインタヴューに、「生きているだけでも幸せです。避難所での生活は大変ですが、必要なものは全部あります。」と答えていた。アメリカ人からこのような答えを聞くことは絶対にあり得ない。

福祉が発達した西洋の国々では、人々は多くを政府に依存し、自助の精神が失われがちであるが、日本人はいまだに公的機関への依存度が低く、自助の精神や私的な組織、団体が健在であることが、今回はっきりわかった。たとえば、いち早くヘリコプターを使って食料や必要物資を運んだのは、おにぎり屋やダイエーなどの会社であった。

また、火事場泥棒や、弱味につけこんで暴利を貪るような商いの光景はあまり見られなかった。これは伝統的な道徳観念がいまだに失われていないことの表れであろう。長年日本の教育史や識字の問題を研究してきた私にとって、いろいろ考えさせられることの多い日々であった。



講演



夏期講座 (一九九四年度)

七月八日—九日
於 本館会議室

会話のトピックは いかにつくられていくか

串 田 秀 也

この報告では、日常会話のトピックが推移的につくり出されていく過程に、社会学的な会話分析の観点から一つの記述を試みた。報告を貫いていた基本的視点は、トピックが単に言語学的対象であるだけでなく一つの社会的事実でもあり、発話と発話の時間的連鎖を組織化する秩序形式の一種だ、ということである。

ここからまず、発話間の連鎖を組織する他の三つの秩序形式(修復的連鎖・ゲーム的連鎖・制度的連鎖)を予備的に措定し、それらと区別可能なものとしてトピック的連鎖を位置づけた。次に、トピック的連鎖そのものの特徴を会話データから検討し、発話と発話のクラス化・クラスとメンバーの往復運動という特徴を導きだし、これをもってトピックの推移的構成の基本的手続きと捉えた。

しかし、この視点だけではうまく記述できないトピック推移もデータ中に含まれていた。これらを記述するためには、トピック的連鎖と他の連鎖形式との関わりを考える必要がある、ここでは特に、修復的連鎖とゲーム的連鎖がトピック推移に関わっているデータを検討した。これら二つの連鎖形式は、先行発話における話者の立場設定(footing)そのものに言及すると見なし得る発話を含んでおり、この種の言及が次の発話によってクラス化されることが、トピック推移のまた別の手続きであると捉えた。こうして、日常会話におけるトピックの推移的構成は、トピック的連鎖においてつくり出されるだけでなく、他の連鎖形式を一時的にいわば「利用」する形でもつくり出されることを論じた。

禪問答

吉川 忠 夫

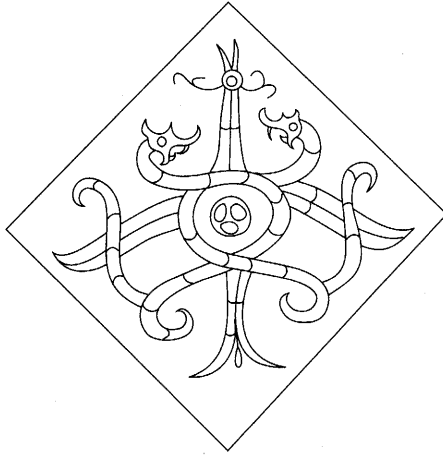
参禪の経験などまったくない私ではあるけれども、禪録に記録されて伝わる禪問答のかずかずは、私を惹きつけてやまぬ何ものかがあるようだ。ごくごく日常的な言葉でやり取りされる問答。問いと答えとのあいだの快いリズム感。言葉の流れとしてはすんなりと耳に入るものが多いのだが、だがさてその問答に託されている意味や如何となると、はたと考えこまざるを得ぬことがしばしばだ。問答がとんととはずむ場合はまだしも、一問一答きりで終わってしまう場合の難しさは格別である。さりげない言葉でありながら、往々にして仏典を背景とする場合があり、その無知に基づく難しさもある。問答が行われた場の説明を欠くために、具体的状況を想像で補わなければならぬ難しさもある。時には、問いと答えとのあいだに置かれるべき間や、声の高低大小まで考えてみる必要があるのかも知れぬ。禪問答は言葉によるやり取りが基本だが、それだけにはとどまらない。仕草で答える場合もあれ

ば、沈黙をもって答えとする場合すらある。

「今も、禪の問答とは、判けの分からん肚芸の意とされる。判けが分からんのは、一として同じでない、千差万別の答えを、一つの論理で括ろうとする、第三者の無理より来ている」。これは柳田聖山先生の「語録の歴史」(『東方学報』五七冊)のなかの言葉。その無理を重々承知のうえで「景德伝灯録」を素材に、とりわけそのなかにあわせて一四八例をかぞえる「西來意」ないし「祖師西來意」、すなわち祖師ダルマが西方から中国にやって来た意図は何か、禪仏教の本質は何か、との問いに対する諸禪師のさまざまな答えを取り上げて、愚かしい類型化の行為をやってみる。

(一)西來に特別の意なしと答える場合。これは西來意の固定化の拒否であろうか。(二)西來意はさておき、即今(いま現在)の意は如何と問い返す場合。(三)棒で打つ場合。四詩句をもって答える場合。(四)眼前の光景風物を呈示する場合。これはそのなかに西來意がありありと現前していることの示唆であろうか。(五)西來の道中の情景を答える場合。(六)身体や道具を使つてのパフォーマンスで答える場合。(七)一音で答える場合。たとえば、「問う、如何なるか是れ祖師西來意。師曰く、擘」(卷二、徳山徳海章)のごとき問答だが、さてこれは一体いかなる意味なのやら。

禅録中の禅問答は、坐れば（参禅すれば）分かる、坐らなければ分からぬという説があるようだが、果たしていかなものであるうか。



笑いの本地・笑いの本願

谷 泰

最近の霊長類学の進展とともに、言語をもたないチンパンジーも、人間と似た状況で笑うことが明らかにされ、笑いは人間に固有だという従来の考えは修正を迫られている。もちろんチンプと人間とで音声形態上の差異はある。前者では呼気が鼻に抜けるのに、人間では口に抜けて、調音される。しかしその差異を、調音という言語発声の基底をなす発声器官上の進化から生じた差異とみるなら、笑いは言語以前とはいえ、コミュニケーション能力の進化段階では、人間化の寸前に生まれたと言えそうである。

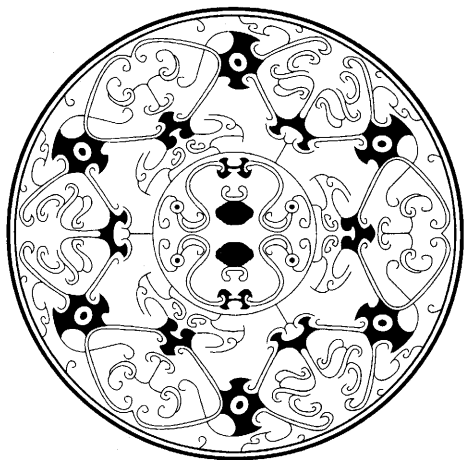
それにしても、笑いには、嘲笑と羞恥、優越と自己卑下等、およそ対立する形容があり、いかにも変幻自在、言語的意味に対応する意味領域をもたない。にもかかわらず、笑う時点が不適切であると、あたかも笑う時点の適切性判断の基準があるかのように、ピンとはずれと見なされ、文脈上の意味推論と無関係ではない。笑いは、どのような状況で発せられ、どのような

コミュニケーション上の機能をもつのか。

笑いは、従来から哲学者や心理学者によって多く論じられてきた。それらは、いわゆるユーモアやジョークの分析を通じてのもので、思いがけない両義性の知覚または文脈上の齟齬を知覚した時点で、抑え難く発せられる、サイコ・フィジオロジカルな反応だといった解釈がなされてきた。しかし具体的な会話場面で生じる笑いは、このような両義性や齟齬が認められない時点でも、多く発せられている。むしろ笑いの生起条件を考察するのに必要なのは、焦点の定まったインタラクションの参加者が、ひとまずの相互的一致という作業前提をもって言及世界を措定しつつ、外部情報と自己記憶の呼び出しによって、刻々その組替えをしている過程での出来事に目を向けることである。こう考えて、会話状況で笑いが生起している事例を分析するとき、すくなくとも、特定の含意推論を可能にする前提情報群からなる言及世界の射程外から、新情報に補追されることで、言及世界の組替えが起こるときに生起している。

コミュニケーションは、言及世界の相互的一致という作業前提のもとで、相互的齟齬の可能性が感じられたとき、それを直ちに示すことで、くすしくも維持されている。このこわれやすい、だが相互透視性のない

コミュニケーション条件下で、コミュニケーションでの協調前提を立てる限りの者が笑うことで、うえのよな経験を、自己の無知をいまここで知る自己に関する言及として公示するとき、われわれは、笑い手の言及世界移行のあり方を知る最低限の手懸かりを手に入れることになる。



フィクションとはなにか

大浦 康介

「フィクション」という言葉のいわば根本的な概念といったものが考えられるとしたらそれは何か。それを問うことが本講演の主題である。

第一に確認すべきことは、フィクションはホントウではないのもちろんのこと、ウソとも違うということである。これは内容の真偽（事実との対応関係）以前、話し手の発話態度の問題である。ホントウもウソも、ホントウであることを主張しているという点では同じ側にある。フィクションははじめからそのような主張は含まない。フィクションとは「明示されたウソ」、「自らを指し示す仮面」なのである。

第二に、フィクションが成立するためには、発話者の意図だけでなく、それに対する受け手の同意が不可欠である。両者の間のこの相互了解は常に問題なく成立するわけではない。フィクションは常に、ホントウとして糾弾され、ウソとして断罪される危険を孕んでいるのである。

第三に、この発話態度あるいは意図は、客観的な形をとっていなければならない、そしてその形は、いわば慣習によって、ひろくフィクションの形として認められていなければならない。フィクションとは、ルールをともなった約束ごとなのである。

このフィクションの形を、フィクションの枠（フレーム）あるいはフィクション装置と呼ぶことができるだろう。演劇においてはそれはまず劇場、舞台、幕である。それはまた役者のアクションでもある。小説でいえば、それはノンフィクションとは異なる小説の書かれた、小説特有の言語ということになる。筋展開にみられる特殊な時間処理などは両者に共通のものと言えるだろう。

ただ重要なことは（これが最後のポイントだが）、フィクションは一方で、さまざまな装置を通じて虚構性を保証すると同時に、もう一方で自らのリアリティを訴えるということである。ホントウであってはならないと同時に、わざとらしくてはならない、つくりもののっぽくてはならない、あくまでリアルでなくてはならない（「本当らしさ」とはこのことにほかならない）。フィクションは、この微妙なバランスの上に成り立っているのである。

開所記念講演 (一九九四年度)

十一月十七日
於 本館会議室

ミメーシスの政治学

『啓蒙の弁証法』の思想圏

上野 成利

「ユダヤ人問題」、すなわちユダヤ人の排除と同化をめぐる問いは、すべての個人の自由と平等とを理念とする西欧近代の市民社会にとってつねに躓きの石であったといつてよい。M・ホルクハイマーとT・W・アドルノは、その共著『啓蒙の弁証法』（一九四七年）で、共同社会の存立にかかわる根源的な問いとして反ユダヤ主義の問題を論じている。

反ユダヤ主義とは何か。さしあたりそれを、市民社会の成員にとって異質な存在としてユダヤ人を外部に排除すること、と捉えてみよう。だがホルクハイマーらは、排除される異質なものはむしろ主体にとって馴染み深いものであるという。主体は、自分にとって

本来馴染み深いものを自分の内部にあるとは認めようとはせず、それを異質なものとして外部へと押しやろうとするからである。反ユダヤ主義を規定しているのはこのような心的機制なのであって、その意味で反ユダヤ主義とは市民の「自己憎悪」にはかならない。そして、この主体によって抑圧される馴染み深いものが、ミメーシスである。

ホルクハイマーらによればミメーシスとは、主体が客体の方へと自分を同化させてゆくことで自己と他者との境界線をかぎりなく無化させてゆく、そういうような世界への主体のかかわりかたのことである。こうした自己融解へと向かうベクトルこそ主体にとって根源的な欲望だとされるのである。しかし主体は現実原則に促され、他者とは区別される自己の同一性を確保してゆかねばならない。そこで発動されるのが「投射」機制である。主体は自他を区別しながらも、できるかぎり他者を自己のなかに取り込んで純粋な一体性をつくりだそうと努め、その一方でどうしても馴染みないものを外部へと押しやるのだ。こうして異質なものがいつい存在しない純粋なミメーシスの共同体がなおもめざされる。ナチスによる「ユダヤ人問題の最終的解決」とはその極限的な形態にはかならない。

こうしてみると、自己融解と自己保存とのせめぎあ

いが生の根底的な条件であるかぎり、投射機制を基盤とする反ユダヤ主義は、人間社会の宿命のようにもみえる。だがホルクハイマーらは、投射によってともかくも主客の区別がなされることのうちに一縷の望みを託す。投射を意識的にコントロールすることをつうじて、他者との宥和の可能性も開けてくるというのである。いわば反ユダヤ主義を徹底的に生き抜くことでメーシスの可能性を救出すること、これが「ユダヤ人問題」にたいする彼らなりの回答であった。

貝原益軒

——内向きの宇宙——

横山俊夫

貝原益軒の著述は、一八世紀から現代にいたるまで、日本社会の安定、洗練、さらに萎縮にも与してきた。それは一七世紀後半からしだいに姿をあらわした「太平」の世のイノチダイジの風潮の産物である。

史家は益軒の秩序思考を、宋代や明代の新儒学の人類型につらなると見て事足りりとしがちであるが、安定社会特有の自足論、内向論とみるなら、より広い視野でとらえなおすこともできる——たとえばストア派のセネカや当今の環境保護派もふくめてはどうか。

このような関心から益軒の『楽訓』をとりあげた。

『養生訓』刊行より二年はやく一七一一年、益軒八二才のおりに出されている。『養生訓』は延命を説いたが、『楽訓』は時がゆるやかにながれ一日が十日に感じられるよう工夫せよとする。工夫とは彼のいう「楽」の実践であり、通ずれば手足も舞う、と。

この「楽」の前提として、徹底した内向が勧められ

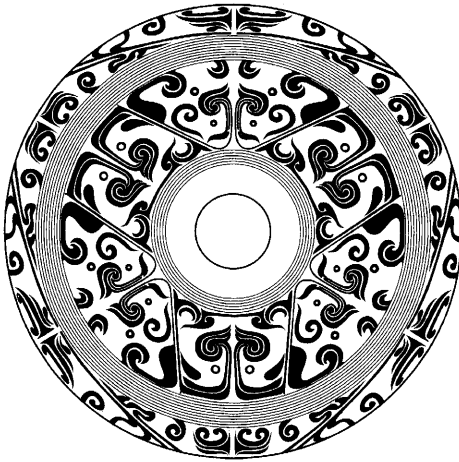
る。ほかの境遇をのぞまず、人づきあいを限りなく淡くする。宴を避け、「小人」に怒らず、老いては人をむさばらずというように。他方、美文で自己を表現することも抑える。ただ、益軒は当時の京都にひろまっていた隠者風を説いたのではない。その内向は二重の壺中にむかう。日本国と外国、自家の内と外、これらの二つの境に天地をへだてるほどの高垣をめぐらす。「楽事」はそのなかで、とされる。

たとえば微酔し、古詩を吟じ、貧者に余財を施す。あるいは経史にふれ、旅先で俚言に耳を傾ける。いずれも気血めぐり、心身ともに軽くなる。好悪の情甚だしい彼が、天地の「やはらぎよろこべる」仁心を体感できたのは花見であった。日記に窺われるその喜びようは、北宋洛陽の市隱邵雍の「歎喜吟」をおもわせる。手足舞い、時は十倍に、とは修辞でなくまことであったか。近年の神経医学が、隔離された人の時間感覚の多様を明らかにしているように。

仙術家とことなり、益軒は死を「定理」として楽しみながら迎えることを説いた。はたして彼自身は如何。小川柳枝軒旧蔵の益軒自彫と伝える木像を紹介しながら想像をたくましくしてみた。

なおこのような内向きの小宇宙は、今後、世界が環境の悪化を理由に余儀なく安定に向かえば、地球規模

で幅をきかせることになるのか。一九世紀の益軒本の読まれ方に触れながらそれを考えようとしたところで時間切れとなった。



『世説新語』の美学

——才から情へ——

小南 一郎

劉宋時代に編纂された『世説新語』は、中国中世の人間観を典型的、かつ具体的なかたちで結晶化して示した、志人小説と呼ばれる作品群の中でも、代表的なものである。この作品には、主として後漢時代末から東晋時代にかけて生きた人々の言行をめぐる、短い逸話が多数収められている。そうした逸話の中には、人々のどうした言行をよしとするかについて、その判断が互いに矛盾するような条も少なくなく、全体としてゆるやかな価値基準しかなかったようにも見えるかも知れない。しかし、詳しく見てみると、個々の逸話をこの作品に採録するに際しては、編者たちに鋭い選択基準があったことが知られる。その基準は、歴史的な真実性とは関係がなく、倫理や政治的有效性などとも関わらない、いわば審美的な基準であった。

この作品の中には、漢代の儒教的なりゴリズムに反抗し、精神的な自由を求めた魏晋時期の知識人たちが

とった、時には奇矯におよぶ発言や行動が、多く記録されている。しかし、実は、編集者たちには、そうした反抗の意味が、もう十分には理解されなくなっていたように見えることも、そうした美学的価値基準と密接に関わるに違いない。たとえば竹林の七賢たちの行動について、かれらの機智を中心とした才華を表わす逸話が興味本位に集められており、七賢たちの思想的な苦闘については、ほとんど注意が払われない。もっぱら華やかな才の表現のみが注目されているのである。

しかし一方では、そうした才をきらめかせる人物たちが、実は人間的に嫌味な存在である場合が多いとの認識も育ちつつあり、むしろ豊かな情に溺れる人々の行動の方に、人間性の真実を見ようとする方向に人々の価値観が動きつつあったように見える。情は中国の思想の流れの中で、常に扱いにくいものとされ、時に人々が備えている“天理”を乱すものとして、悪者扱いされることもある。そうした中で『世説新語』が、情に心を乱されることを、人間の証明として、強く肯定したことは注目してよいであろう。この作品の持つ独自の意味も、単に人々の華やかな才に支えられた言行を記録しているだけに止まらず、むしろ情への深い思い入れにあったと考えるのである。

退官記念講演

一九九四年三月十七日
於 本館 会議室

近代日本の「満州」認識

古屋 哲 夫

現在にいたるまで、満州の日本人移民が残してきた残留孤児の問題が続いていることから逆算すると、日本は移民のために満州を欲しがっていたようにも見える。しかし、明治末期に小村外相の「滿韓移民集中論」が注目を集めたことはあっても、実際の移民はほとんど進展せず、現実には満州が移民の場として捉えられるようになるのは、満州事変以後のことである。つまり、満州移民が表現するのは、満州認識の変化の結果であり、そこには満州認識の行き着いた地点を見ることが出来る。

日本人の満州への関心が強まるのは、日清戦争の頃からであり、朝鮮を支配するための防波堤としてであった。日露戦争の目的も、容易に進まない朝鮮の支配を完成させるために、ロシアの勢力を排除して満州を朝

鮮と外部を切り離す防波堤たらしめる点にあった。

しかし日露戦争後の日本の政策が、一転してロシアと提携し、列強に対抗して満州支配を強化しようとする方向に転ずると、それにともなつて、満州を特殊権益地域とする捉え方が台頭してくることとなる。すなわち戦勝によって獲得した満鉄・同付属地・関東州租借地といった権益は、「明治天皇の遺産」であり「十万人の血と二十億円の軍費を支払った代償だから手放すわけにはゆかない」とか、「満州が中国の手にとどまったのは、日本がロシアと戦ったお陰であるから、日本は満州について特殊の発言権がある」といった見方が強く主張されるようになった。

しかし実際の権益は、ロシアの残りの比較的短い期限のついたものであり、日本側の権益意識とは大きな落差のあるものであった。しかもそれに対しては、中国側の国権回収運動が次第に高まってくるのであり、そうした状況のなかで、一方では、この落差を強権的に埋めようとする二十一箇条要求が展開されるとともに、他方では、満蒙独立運動のような満州に親目的な地方政権を打ち立てようとする陰謀が企てられることとなる。

さらにシベリア出兵の過程で行われた反革命政権育成の企ては、軍部の中に政治的陰謀の経験を蓄積した

ことであろう。袁世凱死後の軍閥内戦のなかで、満州は親日政權樹立のための陰謀の場と化すると同時に、特殊權益の要求は、治安維持の観点に収斂してゆくこととなった。そしてそれは、満州を日本人を含む「内外人安住の地」たらしめよというスローガンに至るのであり、そこにはすでに、満州事変を正当化する論理をみることが出来る。

しかしその論理は、中国人を納得させるものではなく、親日政權としての満州国も、北満を中心とした激しい反満抗日運動に見舞われることになるのであり、それへの対抗として、軍事討伐とともに、移民団の送出という政策が打ち出されたのであった。日本人移民の基本的役割は、治安維持の拠点を造り出すことになり、満州移民問題は、この点を基礎にして検討されなくてはならないであろう。



彙報 (一九九四年一月より二月まで)

おくりもの

。山本有造教授は、著書『両から円へ』(ミネルヴァ書房、一九九四年)により、第三七回日経・経済図書文化賞を受賞(十一月三日付)。

人のういき

。古屋哲夫(日本部)教授は、停年退官(三月二日付)京都大学名誉教授の称号を授与(四月一日付)。
。山下正男(西洋部)教授は、辞職(三月二日付)、京都大学名誉教授の称号を授与(四月一日付)。
。三浦國雄大阪市立大学教授は、併任教授(比較文化研究部門、四月一日〜一九九五年三月三十一日)。
。串田秀也大阪教育大学助教授は、併任助教授(比較文化研究部門、四月一日〜一九九五年三月三十一日)。

。曾布川 寛(東方面部)助教授は、教授に昇任。
。田中 淡(東方面部)助教授は、教授に昇任。
。佐々木 克(附属東洋学文献センター)教授は、当研究所教授(日本部)に配置換。
。藤井讓治(日本部)助教授は、文学部助教授に配置換。
。金 文京慶應義塾大学助教授を当研究所助教授(東方面部)に採用。
。岡村秀典九州大学助教授は当研究所助教授(東方面部)に転任。
。井波陵一滋賀大学助教授は附属東洋学文献センター助教授に転任(以上四月一日付)。
。田中雅二助教授(西洋部)は、委任経理金により、二月二三日広島発、アンナマライ大学、マドラス大学、シンガポール大学に於いて食文化に関する調査及び文献資料蒐集を行い、三月一八日帰国。

。前川和也教授(西洋部)は、委任経理金により、二月二八日大阪発、大英博物館に於いてシュメール粘土板に関する研究、ワルシャワ大学に於いてポランド楔形文字研究の現状及び所蔵粘土板調査を行い、四月四日帰国。
。高田時雄助教授(東方面部)は、三月十日大阪発、ペンシルヴァニア大学に於いて「中世白話に関する国際学会」出席、ローマ教皇庁図書館に於いてキリシタン中国語学に関する文献資料蒐集を行い、四月一二日帰国。
。梅原 郁教授(東方面部)は、三月二二日成田発、大英博物館に於いて敦煌遺物に関する調査及び研究打ち合わせを行い、三月二九日帰国。
。高田時雄助教授(東方面部)は、五月三〇日大阪発、国家文物局、新疆ウイグル自治区博物館、甘肅省博物館等に於いて中国語史関連文物の調査を行い、七月六日帰国。
。岡村秀典助教授(東方面部)は、六月六日福岡発、社会科学院考古研究所、河内省博物館等に於いて黄河流域と長江流域の墓制の比較研究を行い、六月二

一日帰国。

。梅原 郁教授（東方部）は、六月一五日大阪発、エルミタージュ美術館、ロシア科学院図書館、フィンランド国立美術館、スウェーデン東洋美術館・国立民族学博物館に於いて中央アジア将来の文物に関する研究資料の蒐集を行い、六月二二日帰国。

。前川和也教授（西洋部）は、委任経理金により、七月七日大阪発、大英博物館に於いてシュメール楔形粘土板文書の研究を行い、八月三一日帰国。

。田中 淡教授（東方部）は、ユネスコ文化遺産保存日本信託基金により、七月一七日大阪発、国家文物局に於いて大明宮含元殿日中共同保存事業に係る調査打ち合わせ、大明宮遺址に於いて同事業に係る現地調査を行い、七月二三日帰国。

。谷 泰教授（西洋部）は、七月二二日成田発、大英博物館に於いて動物学系・主任研究員クラットン・ブロック氏と家畜化の過程についての意見交換及び文献資料の蒐集、イタリア・ベルガモ県にて出生時の母子関係介入技法につ

いてのデータ蒐集を行い、八月二六日帰国。

。金 文京助教授（東方部）は、七月二七日大阪発、雲南省文化庁に於いて「儼戲儼文化国際學術研討会」出席、貴陽市評劇団、復旦大学古籍研究所に於いて中国演劇に関する資料を収集し、八月一五日帰国。

。金 文京助教授（東方部）は、八月二五日大阪発、ソウル大学に於いて「第十四次中国学国際學術会議」出席、慶州博物館に於いて古代日韓関係についての資料収集、海印寺に於いて高麗大藏経についての資料収集を行い、八月三一日帰国。

。梅原 郁教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、八月二九日大阪発、大英博物館及びスウェーデン民族学博物館に於いて中央アジア出現簡牘他法制文書に係る資料調査を行い、九月二二日帰国。

。富谷 至助教授（東方部）は、文部省科学研究費補助金により、八月二九日大阪発、大英博物館及びスウェーデン民族学博物館に於いて中央アジア出現

簡牘他法制文書に係る資料調査を行い、九月二二日帰国。

。狭間直樹教授（東方部）は、九月四日大阪発、近代史研究所、第一歴史檔案館、北京図書館、北京大学、中国人民大学に於いて国民革命に関する研究資料蒐集及び学術交流を行い、九月一六日帰国。

。井狩彌介教授（西洋部）は、委任経理金により、九月八日大阪発、タミルナードゥ州政府東洋写本図書館、アディヤール図書館、ケラララ大学東洋学・写本図書館、ケラララ州イリンジャーラクダ在住のヴェーダ・ヴァードウーラ学派伝承の継承者バラメーシユヴァラム・ナンブーディリ氏宅に於いてヴェーダ文献写本の調査と資料を収集し、九月二七日帰国。

。高田時雄助教授（東方部）は、委任経理金により、九月二八日大阪発、パチカン図書館に於いてキリシタン中国語学に関わる資料蒐集を行い、十月一二日帰国。

。麥谷邦夫助教授（東方部）は、委任経理金により、十月三〇日大阪発、北京

社会科学学院、八仙呂、上海社会科学学院、福建社会科学学院、香港大学、台北故宫博物院に於いて道教文化と食物禁忌に関する資料蒐集及び現地調査を行い、十一月二〇日帰国。

。桑山正進教授（東方面）は、文部省科学研究費補助金により、十月三〇日大阪発、パキスタン考古局、タキシラ遺跡、ラホール博物館に於いて佛塔遺跡に関する調査を行い、十一月二七日帰国。

。岡村秀典助教授（東方面）は、文部省科学研究費補助金により、十月三〇日大阪発、パキスタン考古局、タキシラ遺跡、ラホール博物館に於いて佛塔遺跡に関する調査を行い、十一月二七日帰国。

。稲葉 穂助手（東方面）は、文部省科学研究費補助金により、十月三〇日大阪発、パキスタン考古局、タキシラ遺跡、ラホール博物館に於いて佛塔遺跡に関する調査を行い、十一月二七日帰国。

。船山 徹助手（東方面）は、文部省科学研究費補助金により、十月三〇日大

阪発、パキスタン考古局、タキシラ遺跡、ラホール博物館に於いて佛塔遺跡に関する調査を行い、十一月二七日帰国。

。曾布川 寛教授（東方面）は、委任経理金により、十一月六日大阪発、北京大学、故宫博物院、山東省博物館等に於いて中国美術に関する調査及び資料蒐集を行い、十一月二〇日帰国。

・狭間直樹教授（東方面）は、十一月九日大阪発、国立中央図書館に於いて「孫文創立国民党一〇〇周年学術討論会」に出席、近代史研究所に於いて国民革命及び梁啓超に関する研究資料蒐集を行い、十一月二七日帰国。

・岡村秀典助教授（東方面）は、文部省科学研究費補助金により、十二月七日大阪発、蘇州市草鞋山遺跡に於いて先史時代水田の発掘調査を行い、十二月一三日帰国。

外国人研究員

。周 紹泉 中国社会科学院歴史研究所副研究員

徽州文書の研究（比較社会客員部門）

受入教官 小野教授

期間 三月一五日～九月一四日

。Richard Rubinger

インディアナ大学東洋言語・文化学科教授

一九世紀日本における識字の社会史的研究（日本学客員部門）

受入教官 横山助教授

期間 五月二三日

一九九五年五月二二日

。Paul Dumouchel

ケベック大学モントリオール校教授

近代ヨーロッパにおける医学思想と医療制度（比較社会客員部門）

受入教官 富永助教授

期間 十月一日

一九九五年五月三一日

招聘外国人学者

。金 正起 西原大学校教授

一八七六～一八九四年朝鮮・清朝関係史の研究

受入教官 森助教授

期間 一月二十日、

一九九五年一月一九日

。Marguerite Wells ウーロンゴン大
学助教

「俄」におけるユーモアの研究

受入教官 横山助教

期間 三月一日～五月三十一日

。張 正明 山西省社会科学院研究員

明末清初における山西商人と国家権力の研究

受入教官 小野教授

期間 四月一日～五月三十一日

。Pierre Rasanvallon フランス社会

科学高等研究院主任研究員

国民主権の政治社会学的研究

受入教官 富永助教

期間 十月十七日～十月三十一日

。錢 婉約 武漢大学歴史系講師

日中近代思想の比較研究

受入教官 狭間教授

期間 十月一日～

一九九五年九月三〇日

。榮 新江 北京大学歴史系教授

中央アジア発現写本による多言語社会の研究

受入教官 高田助教

期間 十月二日～十一月五日

。劉 秉虎 延辺大学民族研究所助理研
究員

日本統治期朝鮮人の海外移住に関する
研究

受入教官 水野助教

期間 十一月一日～

一九九五年十一月三十一日

外国人研修員

。Fabrizio Pregadio イタリア中極東

アジア研究所メンバー

「周易参同契」の注釈

受入教官 吉川教授

期間 七月一日～

一九九五年三月三十一日

。Francois Daniel Voegelin ジェネー

ブ大学博士課程大学院生

ヴァードウーラ・シュラウターストラ

第五巻（動物犠牲祭章）の研究

受入教官 井狩教授

期間 九月一日～

一九九五年二月二八日

外国人研究生

。James George Robson カリフォ
ルニア大学博士課程大学院生

中国思想史における南嶽衡山の研究

受入教官 荒牧教授

期間 四月一日～

一九九五年三月三十一日

。Monika Elisabeth Kure チャービ
ンゲン大学博士課程大学院生

近代日本における書簡文例の研究

受入教官 横山助教

期間 四月一日～

一九九五年三月三十一日

。Abigail Schweber ハーバード大学

博士課程大学院生

政治的社会化に関する研究

受入教官 山室助教

期間 四月一日～

一九九五年一月三十一日

。Hildegard Scheid ヴィルツブルグ

大学博士課程大学院生

中国明時代の官宮機構と朝貢の関係

受入教官 田中教授

期間 四月一日～

一九九五年三月三十一日

Brigitte Seger

現代日本における「眠り」の文化学的考察

受入教官 横山助教授

期間九月十二日

一九九五年七月三十一日

John Salvatore Lobreglio

十九世紀後半の日本における政治と仏教の社会的的研究

受入教官 横山助教授

期間 十月一日

一九九五年三月三十一日

Andrew Meyer

ハーバード大学博士課程大学院生

「五経正義」の研究

受入教官 吉川教授

期間 十一月一日

一九九五年六月三〇日

東洋学文献センター講習会

。一九九四年度漢籍担当職員講習会(漢籍電算処理)

第一日(一〇月三日)

人文科学とデータベース(講演)

大型計算機センター教授

星野 聡

東洋学文献類目の編纂とフォーマット(講義)

村田康彦

東洋学文献類目冊子体作成について(講義)

大型計算機センター技官

河野 典

AI情報検索(講義)

大阪国際女子大学教授

桶谷猪久夫

第二日(一〇月四日)

漢字典と漢字合成法(講義)

同志社女子大学講師 丹羽正之

漢字コードの問題点とISO 10646

UCS(講義)

学術情報センター教授 宮澤 彰

計算機処理入門(講義)

大型計算機センター技官

隅本榮子

データベースの概観(講義)

大型計算機センター助手

川原 稔

データベース検索(一)(実習)

第三日(一〇月五日)

知識情報処理(講義)

大型計算機センター助手

石橋勇人

漢字コードの話―漢字と外字の処理―

大型計算機センター助手

小澤義明

データベース検索(二)(実習)

第四日(一〇月六日)

情報ネットワーク(講義)

大型計算機センター助手

金沢正憲

UNIXと情報検索(講義)

大型計算機センター助教授

安岡孝一

データベース検索(三)(実習)

第五日(一〇月七日)

マルチメディアと言語処理(講義)

国立民族学博物館助教授

久保正敏

大学間ネットワークの状況について(講義)

大型計算機センター技官

櫻井恒正

。一九九四年度漢籍担当職員講習会(中

級)

第一日(十一月七日)

漢籍一般(講演)

東京大学教授

松丸道雄

和漢籍(講義・実習)

勝村哲也

第二日(十一月八日)

經部書(講義・実習)

大阪大学教授

加地伸行

総論 集部書(講義・実習)

井波陵一

第三日(十一月九日)

近人書(講義・実習)

狭間直樹

史部書(講義・実習)

高田時雄

第四日(十一月一〇日)

子部書(講義・実習)

金 文京

朝鮮本(講義・実習)

富山大学教授

藤本幸夫

第五日(十一月十一日)

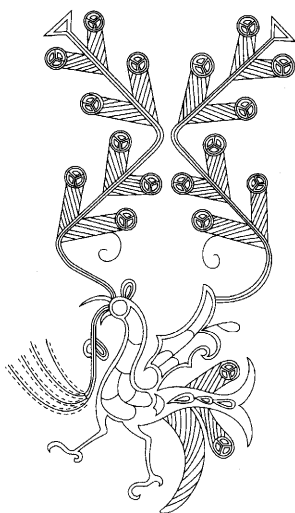
仏書(講義・実習)

華頂短期大学教授

落合俊典

質疑応答

梅原 郁



お客さま

一月三十一日

社会科学高等研究院主任研究員 Viviane Alleton (ク・セ・シエ文庫の『中国文法』の著者として知られる。一九八五年度の外国人研究員 Françoise Sabban にすめられて本所を訪問。所長と富永が応接した後、文献センターで漢籍を閲覧した。)

一月三十一日

中華人民共和国中央文献研究室副主任 金冲及(専門は、中国近現代史。『周恩来伝』『朱徳伝』などの著書がある。狭間、小野、バスチド・ブルギエール、森石川が応接し、中国における研究状況と人文研の研究体制について意見を交換した。)

三月九日

ハンブルク大学助教授 K. Preisdanz 女史、ラ・トロープ大学(オーストラリア)教授 E. Franco (井狩班「古典インドの法と社会」の研究活動の一部として、講演会を分館会議室で開催した。)

四月一五日

中国社会科学院歴史研究所研究員 黄宣

四月一八日

民(「平民儒者顔鈞とその大中思想」の題目で報告。新発見の史料を紹介しつつ、王学左派の思想家顔鈞について研究発表をしていた。)

国立シンガポール大学社会学学科講師 Tong Chee Kiong (国立民族学博物館に客員教授として招かれた。京都では、公開講演を兼ねた田中班「主体構築の文化的特質」にてシンガポール華人の葬礼について報告し、研究会の後、班員の人々との交流を深めた。)

四月一九日

プリンストン大学教授 余英時(「章学誠文史校讎考論」の題目で報告。すでに専論のある章学誠について、新見解を含む発表をしていた。)

四月二五日

ケルン大学現代中国研究センター主任教授 Thomas Scharping (中国の人口論等の専門家。本研究所を表敬訪問し、文献センターで書庫の見学と漢籍を閲覧した。阪上、横山、狭間(本館)、狭間、石川が応対した。)

六月二八日

台湾中央研究院近代史研究所副研究員 頼惠敏(本研究所客員研究員である周紹

泉氏の報告を来聴。また、清代女性史、特に皇族の女性の問題について所員と意見を交換していただいた。）

九月二〇日

ベルリン自由大学フリードリヒ・マイネッケ研究所教授 Knut Schulz (ドイツ・ツンフト研究の第一人者である。「中世後期都市のツンフト法と市民法」の講演をおこなっていただいた。)

十一月一日

中国社会科学学院歴史研究所研究員 變成顯 (「明代黄冊原本の考正について」の題目で、日本語による報告。従来明代の賦役黄冊とされてきた京大文学部所蔵史料について、実証的に再検討していただいた。)

十二月五日

国立シンガポール大学日本文化研究学科 講師 Timothy Tsu (日本学術振興会の招きで来日した。京都では、公開講演を兼ねた田中班『主体構築の文化的特質』にて台湾の植民地化過程について報告し、研究会の後、班員の人々との交流を深めた。)

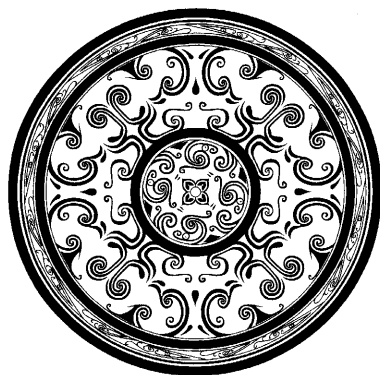
十二月六日

ナンシー第二大学教授 Michel Bur (日本学術振興会の招きで来日され、「十

十二月八日

「十二世紀フランスにおける盛土城砦の形態と類型」で、氏のシャンパーニュ地方城砦発掘の成果を要約していただいた。)

カルフォニア大学・サンジェゴ校教授 Marcel Henaff (専門はフランス思想。『サド、放蕩な身体 of 発明』『クロード・レヴィ・ストロース』などの著書がある。「人喰いの都市—ルソー、大数、社会的紐帯の濫用」の題で講演したのち、所員及び大学院生数名と討論をおこなった。)



「大東亞共栄圏」研究のむつかしさ

山 本 有 造

「満州国」の研究」班の余勢を駆ってすぐに「大東亞共栄圏」をやるうとしたのはやや無謀であった。

もちろん、この課題にいま直ちに正面から取り組むことの困難は承知していたから、まずは準備会のつもりで「経済構造」に特化する小研究会から始めるだけの用心はした。しかしこのことが、かえって研究会運営を難しくしたことも否めない。まずは、経済に特化したために、メンバーの数が限られたこと、そしてなによりも、戦時下中国経済および占領下東南アジア地域経済の専門家の参加を得られなかったことである。

言い訳をすれば、参加を得られなかったのではない。いまの段階では見つけられなかったというのが正確である。「経済構造」に特化したのは慎重のようであり、そうではなかったかもしれない。むしろはじめから、経済も政治も文化も、そして歴史、地域研究等を問わず、広く関心を持つ専門家に呼びかけて、いわばブレイン・ストーミングからはじめたほうがよかったかも

しれない。

このことは「大東亞共栄圏」研究における当面の方法論に関わる。要するに、事実をつみかさねてそこからある歴史像を組み立てるには対象が広すぎる。あるいは現状では個別事実の検証も、またそのための基礎資料も少なすぎる。いまは逆に、まず小さな仮説的イメージを先に組み立ててその実証を行うという手順を繰り返すほうがよいかもしれない。まずはカンに頼って試掘ボーリングを幾本か掘ってみるようにな。

わが班も三年目に入って成果の取りまとめを考える時期に入った。当面は「一九四〇年代「日本植民地帝国」の構造」といった方向に軌道修正して、とりあえず研究会としての一期を完了させるつもりでいる。

班運営にすこし失敗したかと班長として反省している。しかし「大東亞共栄圏」研究は、人文型共同研究の恰好のテーマであろう。またある意味では誠に時宜にかなったテーマともいえよう。いま「東アジア経済圏」の興隆が注目を集めている。「大東亞共栄圏」と「東アジア経済圏」、経度でいえば東経九〇度から一五〇度の間に巨大な経済域を構成しようとする構想の類似性を指摘すること、これを軽薄な歴史類推とのみ言い切ることはできないように思われる。

人口膨張と都市化率

森 時彦

中国市場論で知られるG・W・スキナーは、揚子江下流域の都市化率（二千人以上の都市にすむ住民の総人口に占める割合）を推計して、一三世紀には一〇％を超えていたのが一八四〇年代には八％以下に低下したと概算している。さらに中国全体について都市化率を試算した趙岡、陳鍾毅両氏は、戦国時代後期の紀元前三〇〇年頃の一四・三％から、唐代の天宝四年（西暦七四五）には二〇・八％にまで上昇し、そのまま宋末まで二〇％超過の水準をたもったが、以後は下降に転じて清朝の嘉慶二五年（一八二〇）にはわずか六・九％にまで落ちこんだとする。数値にはかなりの開きがあるものの、いずれの推計も宋代から清朝中期にかけて都市化率の低下があったとする判断にかわりはない。

ことに刮目すべき推計結果をえた趙岡らは、その原因を農民一人当たりの余剰食糧生産力の観点から追究する。もし一人の農民がその生産量のうち五％しか余

剰にまわせないとすれば、一〇〇万都市を維持するには二千万人もの農民が農産物を輸送できる範囲内で耕作していかなければならないが、もしそれが二〇％にアップすれば五百万人でよいことになる。ところが宋代以降に顕著になった人口膨張は、一人当たり耕地面積の減少をもたらし、農業生産の集約化をうながした。その結果単位面積当たりの生産量は若干増加したものの、農民一人当たりの生産量は逆に三六％も減少した計算になり、余剰食糧生産力もその分ダウンした。この趨勢はどうぜん、宋代に出現したような巨大都市の成立を困難にしていた。しかも農村部では集約化にともなう商品作物へのシフトと織布など副業収入への依存がつよまり、商品流通と手工業生産が活発化した。それにつれて農村に至近の小鎮に交易市场が形成され、商人、職人といった非農業人口が都市からこれら住民二千人未満の小鎮に拠点をうつして、農村の商品流通、手工業生産の一環を担いはじめた。この「非農業人口の分散化」こそが、宋代から清朝中期にかけての都市化率低下の真相だと、趙岡らは考えるのである。

機械化以前の社会において都市化率が二〇％を超えていたとする大胆な数字については、すでに宋代の都市人口が過大にカウントされているとの指摘もあり、慎重な検討を要することはいうまでもない。しかし宋

代以降の中国社会を大きく「農村化」という方向でとらえようとする趙岡らの視点は、スキナーの市場論を敷衍した部分もふくめ、きわめて刺激的かつ魅力的である。現にわれわれの「中国近代の都市と農村」研究班でも、城居地主、農民の農村部への展開という角度から宋代以降の「農村化」をトレースし、内陸部における「農村化」の続行と沿海部における西欧型都市化の進行という両面から複眼的に近現代の中国社会を分析しようとの主張が議論にのぼっている。都市と農村の関係は前近代から近代にいたる中国社会の構造解明につながる鉱脈の一つかもしれないという思いは、いまや確信にかわりつつある。

組織化の実相

上山 隆 大

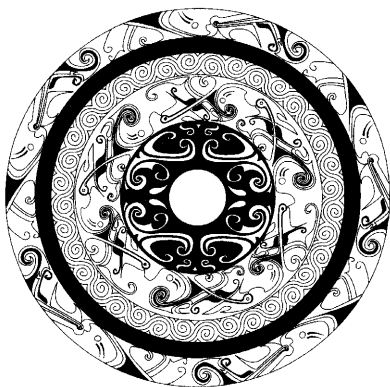
「近代における研究者の組織化——研究所、学会、学派」という共通テーマで始まった共同研究がどのような方向に向かうのか、ごく最近この研究会に参加し始めたわたしには正直に言ってまだ明確ではない。参加者の独立した関心にそって隔週ごとになされる諸報告は、それぞれに刺激的ではあるけれども、現在のところ何らかの統一された地平に進んでいるとはいえないように見える。しかしながら、そのような幾分ゲリラ的な報告と議論の交差から、当初のテーマがいわば自生的に印画からボジへ炙り出されて、落ちつくべきところに落ちつくというのがオーガナイザーの方々の巧妙な画策ではないかと思われる。

一九世紀後半の西洋における知識、とりわけそのミニチュアとしての「科学知識」と社会秩序の関係を考察のテーマとする意図は、基調報告によると次のようなものである。整然と統一され秩序化された知識とそれを基礎とする社会秩序の再構成への強い欲望があら

わであった一九世紀初めまでとは違って、世紀の後半にはより実践的な知識の応用を求めて、科学の専門化、個別化の傾向がはつきりと現れる。そしてその風潮を背景として出現する、特定の研究目的に立つ研究所や専門学会のあり方に注目することは、あるいは国家政策のレベルで、あるいは資本や産業のレベルで、またアカデミズムのレベルで、科学さらには知識全般が社会の様々な絡み合いの中で構成され消費される実態に議論を展開するとは口となりうる。

これは、マートンやクーンの名を出すまでもなく、比較的耳慣れた「知識社会論」に聞こえるかもしれないけれども、そうした議論にありがちな「科学の制度化」や「職業化」のようなクリシェを避け、「組織化」と題されている点に興味がいく。何かがオーガナイズされるときにはオーガナイズする主体の周辺に意図の磁場が形成されているであろうし、オーガナイズする者とされる者との間にはローカルな権力関係が滑り込む。少なくとも一九世紀後半の複雑化した科学知識の舞台では、「制度化」などというありきたりの社会学的言辞では捉えきれない、よりインターナルなより細部の分析が求められる。科学的言説の実際の生産現場には、分析の対象となる様々なナラティブが充満している。研究上のプラクティカルな手続きの決定パター

ン、研究者間のアイデアと情報交換の位相、研究ファンドの構成、こうした単純な概念的把握を拒むミクロな関係を丹念に読み解く作業を通して、生産の現場をオーガナイズしより広い社会の構造へ結びつけている経路が浮かび上がってこよう。「組織化」の研究は、科学知識の生産と消費に関わる複雑なポリティックスの絡み合いにミクロの解析を施そうとしているのかもしれない。



所のうち・そと

パブの昼食

梅原 郁

ここ数年、ロンドンを訪れる機会が多い。ただ、スタイルン将来の敦煌文献を調べる目的だから、ブラックフライアーズにある大英図書館の東洋・印度部門に行先は限られる。日曜を除き、朝九時半から夕方五時すぎ（土曜は一時）まで閲覧室で過すが、やはりランチの時間は楽しい。先頃評判になった『イギリスはおいしい』などという書物を持出すまでもなく、ロンドンの食事はたしかに感心しない。それを証明するかのように、アメリカ風ハンバーグの店がゆくとびに増え、しかも満員とくる。ちなみにセットの値段は二ポンド八十。しかし、イギリスでも満更捨てたものではない食事もある。それはパブで食べる昼食である。つい最近まで、日本の百科事典や広辞苑にはパブの十分な説明がなかった。従って日本人の多くがパブをバーの親類と誤解しても仕方なからう。違うのである。何よりもパブには昼と夜の顔がある。

昼のパブは有難くも一番うまくて安いイギリス風の昼食

が賞味できる場所である。キッド・パイ、フィッシュ・アンド・チップス、スコッチ・エッグ、キップパーズ、スカンピ等々、それに山盛りのポテトやベークド・ビーンズ。そしてパイントのビールのグラス。これは馴れてくると、他の場所では味わえぬ満足感を与えてくれる。しかも、店によって微妙な変化もあり、それらをハシゴしていると興味つきることなどない。

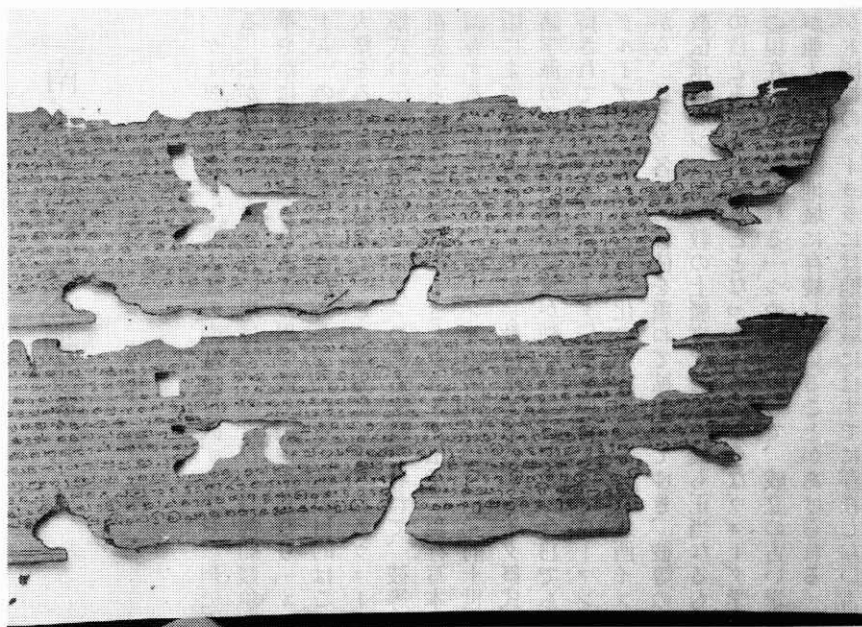
地下鉄のブラックフライアーズから図書館までは直線で八百メートルほどだが、その両側や、大通から百メートル以内だけで、パブの数は十数軒にのぼる。そのほとんどに入ってみたが、店構え、インテリア、食物、客種そしてビール、雰囲気は多様であり、実に見事に階級性、住みわけを作りあげている点に感心させられる。テムズに沿ったパブAは、課長クラス以上の会社のエクゼクティブが多く、皆紺がグレイの背広、大通の横町のパブBはネクタイ族はお断りの肉体労働者の集まる場所、四つ角のパブCは、オムレツなども揃える女性の食事優先といった具合。それでいて値段の方はそれほど差はない。ビール・パイントはどんなに高くても三ポンドはせぬから、それコミで千円もあれば、お昼は十分である。蛇足ながら、さきほどのイギリス談義の随筆の著者は、お酒が病的にお嫌いのようで、そのためパブにはほとんど触れておられぬ。些か畫龍点睛の感なきにしもあらずである。

南インドの写本調査から

井 狩 彌 介

ケーララはインド亜大陸の南端に位置する小さな州である。私が訪れたのは九月の半ばで、ひとびとは龍船競争が華やかに繰り広げられるこの州の最も賑やかな祭り「オーナム」の話題でもちきりだった。ただし、私の目的はこの大祭をみることにではなく、この地方に伝承されるヴェーダ祭式の伝承を担うブラーマンのある家系を尋ねて、彼等が祖先から遙かに受け継いできたヴェーダ伝承の現存写本を調査することにある。南インドの諸州には、紀元前十世紀頃にまで遡る古代インドの宗教伝承であるヴェーダ祭式の諸学派の中でも古層の伝承が細々とではあるが今日でも保持されてきている。ヴェーダ伝承を保持するブラーマン・グループが、かつて古代文化の中心地であった北西インドから、インド各地に移住を重ねて拡がってゆき、彼等の宗教伝承はヒンドゥー教の上層文化として最も正当なるものの核とみなされることとなった。そのようなヴェーダ学派の現在分布にみられる一つの傾向として、成立の古い学派が亜大陸の周縁地域に存続していることがあげられる。インド南端のケーララには他地域にはすでに存在しない古い

学派がなお存在しているのである。今回の再訪の目的は、そのようなヴェーダ祭式伝承の古学派の一つであるヴァードゥーラ派の家系の中心となる家に伝わる古写本を調査して、これまで学界には知られていない「新写本」を見つけることにあった。ヴェーダ祭式の展開史の上で重要な位置を占めるこの学派のテクストの、これまで知られている諸写本にはすべて共通した欠陥があり、そのためにこれまで十分な形で研究を進めることができなかった。このテクストが示す独自のスタイルと内容にひかれて研究に取り組みはじめてみたものの、既存の写本だけに頼っていたのではどうしても私の望む形での研究を進めることができない。そういうわけで、「新写本」を求めての私の模索が始まったのである。数年来試みてきた南インド各地での調査と既知の写本にかかわる情報の徹底的な再検討の結果、新写本発見の可能性は、この州の中部にある古い町イリンジャーラクダの郊外にあるヴァードゥーラ派の家系の二つの家に所蔵される写本コレクションにしぼりこまれてきた。各地の図書館に既存のヴァードゥーラ写本（原本から写された二次写本）の入手経緯を精査すると、これらの家からかつて借用されたと思われる複数の原本の存在が推測された。すべてのヴァードゥーラ派の家系の師匠格とみなされてきたこれら二つの家のいずれにも求める写本が見出されなければ、「新資料発見」の可能性は閉ざされて、この数年進



めてきた私の研究は方向転換をしなければならぬ。さいわい、二年前の調査のあとで一つの家のコレクションのなかに新写本が一つあることが判明している。生きた祭式伝承がほぼ失われかけているこの学派の家系では、伝承された写本内容についての情報が曖昧なままに伝わっており、写本に記されるタイトルと内容が必ずしも正確に一致しない場合がある。つまり、写本自体のコロフォンの記述は十分に信用できない場合がある。その理由もいくつか考えられるのだが、ともかくすべての写本を実際に読んでみて、この目で内容を確認する必要があるわけだ。

各地の図書館に現存する諸写本は、いずれも約七〇年程前に原本から転写されたことが明らかにしている。それ以来所在が不明となっているそれらの原写本を含めて、今回はたして「新写本」を見つけることができるかどうか、期待と不安の入り交じった気持ちでこの地にやってきた。入手しうる情報を集めて分析した結果、上記の二つの家に可能性をしぼりこんできたわけだが、目的の写本はあくまでもある「はず」であって、実際にあることの保証はない。この七〇年のあいだに失われてしまっていることもありうるわけだから。写本調査で目的を狭くしぼり込んだ場合、もし結果としてあてがはずれ、空振りに終わったときはきわめて悲惨な心理状態に陥るものである。そのような場合に備えて、たいていはいくつか副次的な調査の用意をして

ゆくことにしているが、このような調査に振り替えた場合は落ち込んでしまい、たいていは腹をこわしたり、風邪を引いたりして体調を崩すはめとなる。今回はさてどうなるか。写本の探索はどこか賭けに似たところがありそうだ。

まず前回の調査で訪れたN家で歓迎され、写本をチェックしながら選り分ける作業を始める。こちらはちょうど祭の期間中で学校が休みだったため、その家の子供たちにも手伝って貰い、写本の撮影を順調に進めることができた。

さて、もう一方の家系のコレクションは、数年来頼み込んで初めて見せてもらうことができたのだが、これまでに出会った写本の中で最も保存状態のひどいものだった。私の目の前に運び出されてきた写本群は埃にまみれ、なかでも古い写本は朽ち果てる寸前の状態だった。そしてこのコレクションにはカタログはおろかりストすら作られていなかった。一つ一つの内容を確かめる気の重い作業が待っていた。こびりついているクモの巣を除き、飛び出す紙魚を払い、断片に化しつつあるヤシの葉の貝葉を一つ一つはがして行くのには細心の注意が必要で、読みにかかる以前にくたびれはててこちらの集中力が尽きかける始末である。もう数年あとだったらおそらく写真にとれる状態ではなくなったことだろう。南インドの高温多湿の天気ななかで、汗が絶え間なくしたり落ちるこの日の午後は、しかし私の一生で忘れ難い時となった。この学派のテクスト（ヴァードゥー

ラ・シュラウタストゥラ）を研究した学者たちが用いてきた既存の諸写本の原本と思われる大部の写本が現われたのである。すでに散逸したと思われるいた古写本が崩壊寸前の姿で私の目の前にあった。その後の検討の結果、このロボロになった貝葉が「失われた写本」であることが確認された。この写本の解明によって既存の写本群の問題点や疑問点のほとんどが解決されることになった。さらにこの写本には、これまでの二次写本に含まれていなかった多くの葉数があることが判明し、事態は新しい様相へと展開することになった。

今回の調査では、学界では未知のテクストを含めて、全部で約十種の新写本を入手することができた。しかし、このすべてを検討し終わるのにはこれから何年かかるだろうか。

調査の期間中に、西インドではペストが猛威をふるっていた。けれども、予想以上の写本発見の成果に興奮していたせいもあって、それがわが身に及んでくる可能性にはほとんど思い及ばなかった。南インドへの避難者たちが次々とやってくる時期にやっと調査を終えて日本に戻ってきた私は、その二日後の研究所の会議に出て、同僚たちから疑惑のまなざしを浴びることになってしまった。

人文倶楽部の誕生

一九九四年五月二一日土曜の午後、北白川分館ロビイはいつもの静けさからは想像できない賑わいであった。旧教官、旧事務官三四名に現職をまじえ、つごう七〇名が集まったからむりもない。一九四三年入所の坂田吉雄氏の音頭で乾杯。「人文科学」とは故高坂正顕氏によるガイステス・ヴィッセンシャフトの訳語なる由。つづいて島田虔次氏から「話すことはない、しかし」に始まる近況報告。鶴見俊輔氏は京都に暮らす「風流」について語った。

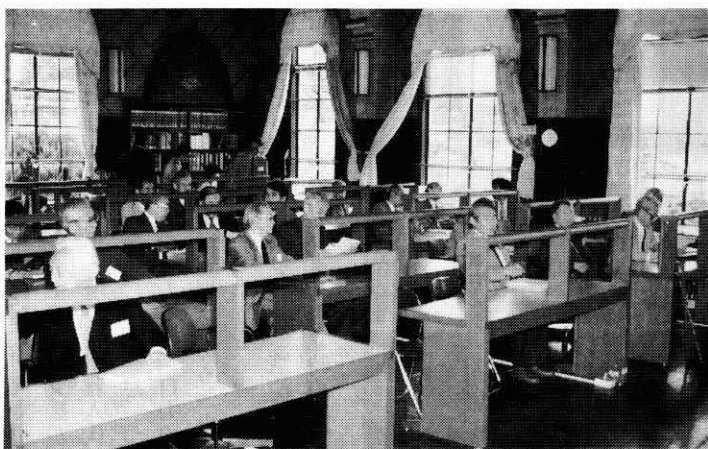
じつはこの宴の前、倶楽部発足の式典？が二階閲覧室でおこなわれた。発起人のひとり坂上孝所長曰く、旧メンバーの方々と交流を密にし、良き伝統を生かしたい云々。つづいて現役ふたりがショート・スピーチ。九一年入所の水野直樹氏は朝鮮近代史研究の現況を、九二年再入所の浅原達郎氏は民国の旧小説作家張恨水について。

さてまた一階。乾杯後は耳も聳するばかり。中庭にて車座で呑む旧習？も復活。もはやそこに根を下ろされる仁も出ようかというころ、清水光芸社による記念撮影。ご町内の太田武男氏滑り込み。その後天空かきくもり、あわや雨中の交歓となる直前、出迎えの明星観光バスで「夜の部」会場アピカルイン松ヶ崎へ。





挨拶は、もうひとりの発起人、河野健二（河野健二）人文科学研究協会理事。人文研へのさまざまな支援が望まれる旨の発言。乾杯音頭は一九三七年入所の長尾雅人氏。旧東方文化研究所の優雅な日々の思い出。一同嘆息。つづいて梅棹忠夫氏が、物資の乏しいころの人文の「自力更生路線」を披露。入矢義高氏は、「北白川僧院」のうっとうしさと故桑原武夫所長の「タイラント」ぶりを寸評。全員爆笑。さらに宮崎昭子氏が人文恋いしやの弁。竺沙雅章氏、人文は人使いが荒い云々。文献センター設立時の苦労話も。石毛直道氏、



昔々元旦に研究室で勉強していた某氏を「救出」した話。さらにあちこちで、珍しい話や幾度聞いても楽しい話に花が咲いた。とどめは上山春平氏による中国の「四人組」と「人文四人組」の比較文化論。

あいまの余興は、一九五八年制作8ミリ映画「人文科学研究所野球大会」の観戦。軍帽腰手ぬぐい姿は「副所長」故山田留蔵氏。故川勝義雄氏も見える。解説にあたった飛鳥井雅道氏、礪波護氏も黒髪ふさふさの登場人物たちに絶句。撮影場所は農学部グラウンド。画面後方、視界を遮るものなく

広がる東山が印象的であった。

後でよせられたアンケートに曰く、毎年開かれよ、外部からも手伝いたし、と。しかし準備は難題山積。予算は？呼びかけの範囲は？名簿は？記念品は諸事情から風呂敷に。図柄は研究所所蔵の拓本から選んだ雲岡石窟仏龕の飛天二体。京染の池田和夫氏が業者間の仲立ちを請けられ、色選びは染色作家渋谷和子氏にご苦心いただいた。ともに故吉田光邦氏に親しかった方々である。それにしても、事務長川合教博氏をはじめ本館、分館の事務室、図書室の有志の皆様には公務とは言い難い諸事にまで奔走していただいた。記して謝意を表したい。

ともあれ人文倶楽部は発足した。しかし次回開催日は未定。担当者一同英気を養っている。ご意見をお寄せいただきたい。

(文責、小南一郎・前川和也・横山俊夫)



書いたもの一覽 一九九四年一月—一九九四年十二月(五十音順)

◎は単行本

飛鳥井 雅道

近代天皇像の展開 岩波講座・日本通史17・近代2

岩波書店 五月

『元禄狂』の紅葉 『紅葉全集』第八卷月報

岩波書店 五月

浅原 達郎

「熱中」の人—端方伝—(六) 泉屋博古館紀要 一〇巻 三月

荒牧 典俊

Some Precursors of The Subconscious Desire in the

Atadandasantia, Zinbun 28

三月

石川 楨浩

東西文明論と日中の論壇 古屋哲夫編『近代日本のアジア認識』

京都大学人文科学研究所 三月

史料収集雑誌

長沙大搶米の「鎮庄」与電信 『辛亥革命与近代中国—紀

念辛亥革命八十周年国際學術討論會文集』上册

中華書局 三月

関于陳望道訳『共產党宣言』

揺れる中国—そのゆくえ 創造する市民 四〇号 七月

若き日の施存統 東洋史研究 五三巻二号 九月

稲葉 穰

ガズナ朝の「王都」ガズナについて

井波 陵一

家庭の秩序—『紅樓夢』における人間関係

荒井 健編『中華文人の生活』 平凡社 一月

稲本 泰生

作品解説(彫刻) 『長岡京市史 建築・美術編』

長岡京市 三月

龍門賓陽中洞の造営目的とその背景に関する試論

美学 一七六号 三月

展覽会評・国宝法隆寺展

宇佐美 齊

書評・ダン・フランク著『別れるということ』

産経新聞 三月二三日

語源探索の楽しみ

◎エリユール詩集(編訳)

『秋』の表象と風土—フランス近代詩から

28 (ポーラ文化研究所) 六五号 九月

書評・マルグリット・ユルスナール著『青の物語』

産経新聞 十月十日

テクスト研究と翻訳との統合の試み—青土社版『ランボー

全詩集』の刊行に寄せて 文学(岩波書店) 秋季号 十月

◎太陽の記憶(佐藤旭と共著)

淡交社 十二月

梅原 郁

舊五代史、遼史、金史刑法志譯注稿(共譯)

東方學報 京都六六冊 三月

書評・中島敏編「宋史選舉志譯注(一)」

法制史研究 四三 三月

「花と中国文化」連載二十二回 週刊 朝日百科「植物の世界」

七月三十一日〜十二月二十五日

祇園閣と大倉喜八郎 「龍池山 大雲院」

京都における年中行事 しにか 五卷十二号 十二月

大浦 康介

アート・ジャパン構想 京都新聞 九月九日

開かれた文学・開かれた批評 文学(岩波書店) 秋季号 十月

岡村 秀典

三角縁神獸鏡の時代 岩井忠熊編『まちと暮しの京都史』

文理閣 三月

青龍三年鏡を追う 京都新聞 三月三十一日

須玖岡本王墓の中国鏡 春日市教育委員会編『奴国の首都 須玖岡本遺跡』

吉川弘文館 五月

外国考古学の動向(中国) 日本考古学年報 四五 七月

中原龍山文化の居住形態 日本中国考古学会会報 四号 九月

墓制の変容から見た国家の発生 西日本新聞 十月二日

落合 弘樹

帝国議会における秩禄処分問題 人文学報 七三 一月

明治政府と華士族 立命館言語文化研究 五一四 二月

山本覚馬『日本史大事典』4 平凡社 二月

明治前期の陸軍下士と自由民権 人文学報 七四 三月

地方官の士族授産論 明治維新史学会報 二四 四月

小野 和子

関于孫中山贈南方熊楠『原君原臣』一書的若干問題

中国哲学 一六 九三年九月

学者と人権感覚 かんじょうせん 京都新聞 一月二五日

満州族の中国征服 『アジアの歴史と文化』四 同朋舎 二月

勝村 哲也

●『漢字典』

『漢字典』の本プロジェクトへの応用 重点領域研究「沖縄の歴史情報研究」

歴史情報研究 ニューズレター 三号 十月

木島 史雄

類書の発生——『皇覽』の性格をめぐって——

汲古 二六 十一月

金 文京

湯寶尹と明末の商業出版 荒井健編『中華文人の生活』

平凡社 一月

關漢卿身世考 関漢卿国際學術検討会論文集

国立台湾大学 史学 六三 三月

漢字文化圏の文字と生活 「孝行録」と「二十四孝」再論 芸文研究 六五 三月

三国志のパラダイム しにか 五卷四号 四月

周瑜 歴史読本・特別増刊スペシャル 四六 五月

所考 SFC Journal 三

五月

宋元文化—古文復興・民間文芸の発展・元曲の世界 『アジア

の歴史と文化』三

同朋舎 五月

西湖と不忍池 和漢比較文学叢書・漢詩と俳諧

汲古書院 五月

中国学の解構再構に向けて

中国——社会と文化 九 六月

中国文学史における語り物 平家語り伝統と形態

有精堂 九月

中国民衆の見た観音——文芸に現れた姿

しにか 五卷十号 十月

竹林神考

中国古典小説研究動態 最終号 九月

高麗本「孝行録」斗二十四考

中国学報(韓国中国学会)三四 十月

「今昔物語集」と中国の近世 日本古典文学大系「今昔物語集」
月報 岩波書店 十一月

桑山正進

The Hephthalites in Tokharistan and Gandhara, Part 2:
Tokharistan. Lahore Museum Bulletin, Vol.5, No.

2 (July-December, 1992) 三月

●法顕傳索引(共編)

京都大学人文科学研究所附属附属東洋学文献センター 三月

Bāmīyān, *Enciclopedia dell'Arte Antica, Classica e
Orientale, Secondo Supplemento 1971-1994, I, Istituto
della Enciclopedia Italiana, Roma, 1994.* 六月

小南一郎

考古学実習 京都大学文学部考古学研究室編『小林行雄先生追

悼録』

漢代の祖霊觀念

二 月
漢代の祖霊觀念 京都六六冊 三月

●楚辭後期の諸作品——道家思想との交流

平成五年度科学研究費成果報告書 三月

尸解觀念の展開

説話伝承学会編『説話…救いとしての死』四月

中国の民芸書

出版ニュース八月中旬号 八月

搜神記の結構

紀念繆鉞教授九十寿辰暨從教七十年論文集「冰
繭彩絲集」 成都出版社 九月

七夕伝承の神話的構造

名古屋科学館天文クラブ機関誌「い」六七号 十二月

齋藤希史

朱子語類讀書法篇譯注(一)(共著)

中國文学報 四八 四月

朱子語類讀書法篇譯注(二)(共著)

中國文学報 四九 十月

『浮城物語』の近代

人文学報 七五 十二月

阪上孝

フランス啓蒙と秩序

平井俊彦編『社会思想史を学ぶ人のため
に』 世界思想社 三月

人口という対象 Bulletin (日仏経済学会) 一六号 十月

佐々木克

西郷隆盛と西郷伝説

岩波講座・日本通史16・近代1 岩波書店 一月

赤報隊の結成と年貢半減令

人文学報 七三 一月

天皇巡幸と民衆

立命館言語文化研究 五一四 二月

明治政府と岩倉具視の位置

岩倉具視関係文書(マイクロ)目

録、岩倉公旧蹟保存会対岳文庫所蔵Ⅲ 北泉社 四月

岩倉具視 京都新聞夕刊 四月五日

「公武合体」とめぐる朝幕藩関係 日本の近世・18『近代国家

への志向』 中央公論社 五月

岩倉具視の京都活性化意見 京都新聞 八月二四日

明治天皇の巡幸と「臣民」の形成 思想 八四五 十一月

鈴木啓司

「自作語り」として見るポー『構成の原理』

人文学報 七五 十二月

曾布川 寛

董其昌の文人画 荒井健編『中華文人の生活』 平凡社 一月

漢代の昇仙画像 東洋学報 七五卷三・四号 三月

「中国書画名品展」解説 澄懷堂美術館 四月

十八世紀の揚州と揚州八怪 「十八世紀の中国絵画」

渋谷区立松濤美術館 四月

漢代画像石とその世界

しにか 五卷四・五・六号 四月―六月

「清朝初期の書画」解説 澄懷堂美術館 九月

高田時雄

南の風 京都新聞 一月一九日

ポール・ペリオの「古代中国語音韻放」手稿について

日佛東洋学会通信 一八号 四月

欧米の東洋学 対談 しにか 五卷三号 二月

アベル・ルミューザ（欧米の東洋学Ⅰ）

しにか 五卷四号 三月

岡井慎吾「日本漢字学史」 しにか 五卷五号 四月

●法顯傳索引（共編）

京都大学人文科学研究所附属東洋学文献センター 三月

●中国語史の資料と方法（編） 京都大学人文科学研究所 三月

可洪隨函録と瑠隨函音疏 『中国語史の資料と方法』 三月

漢字の履歴書七〇

しにか 五卷九号―十二号 九月―十二月

田中 淡

●祁英涛「中国古建築の保護と維持修理」（監訳）

古都調査保存協会 九三年三月

飲食について―『遵生八牋』にみえる食品

荒井健編『中華文人の生活』 平凡社 一月

『園治』の世界―明末の造園論 しにか 五卷二号 二月

建築と庭園の日本の様式

芸術学フォーラム・5『日本の美術』 勁草書房 二月

建築と道教 『道教』の事典 新人物往来社 七月

中国の蔵 『住まいの文化誌・築蔵人間史』

ミサワホーム総合文化研究所 八月

埤の歴史と技術

『中国のタイル』 INAXブックレット 九月

中国園林史研究的現況與問題點 空間 六五期 十二月

書評・張在元編著『中国 都市と建築の歴史―都市の史記』

日本経済新聞 十二月二八日

田中 雅一

●ひと・文化・インド―第二回大阪アジア文化フォーラム（共編）

大阪府生活文化部 一九九三年三月

新曜社 六月

●People, Culture, India: the 2nd Asian Cultural Forum in Osaka (共編) 大阪府生活文化部 一九九三年三月

漁村調査・イラナウィラ 『漁民生活上(スリランカ)基礎調査団報告書』 国際協力事業団 一月

人間・生物・時間——さまざまな時間を求めて/第二回研究報告(共編) けいはんな 一月

割礼考——性器への儀礼的暴力 大淵憲一編『現代のエスプリ320 暴力の行動科学』 至文堂 三月

女神たちの夜・女たちの夜——チダンバラムの九夜祭(ナヴァラートリ) 辛島昇編『インド入門Ⅱ ドラヴィダの世界』 東京大学出版会 三月

●南アジアを中心とする女神崇拜の社会人類学的研究

平成五・六年度科学研究費成果報告書 三月
宗教共同体と法・権力——インドの場合 日本法社会学会編 有斐閣 四月

『法秩序の近代と現代』
人間・生物・時間——さまざまな時間を求めて/第三回研究報告(共編) けいはんな 三月

『在日インド人二世と語る会』の背景——ロンドンの南アジアネットワーク 『日印文化』創立35周年記念特集号

スリランカの民族紛争——その背景と解釈 岡本幸治・木村雅昭編『紛争地域現代史3 南アジア』 同文館 六月

ヒンドゥー・ファンダメンタリズム 井上順孝・大塚和夫編『ファンダメンタリズムとは何か——世俗主義への挑戦』

人間・生物・時間——さまざまな時間を求めて/第四回研究報告(共著) けいはんな 六月

書評・川村邦光著『オトメの身体——女の近代とセクシュアリティ』 産経新聞 七月十二日

南インドのヒンドゥー寺院政策——チダンバラムのナタラージャ寺院をめぐる 岡田重精編『日本宗教への視角』 東方出版 九月

南インドの寺院儀礼と家庭祭祀における供物の人類学的研究 『味の素食の文化センター助成研究の報告』四号 十一月

スリランカ・インドにおける宗教問題 日本未来学会編『宗教の未来』 東京書籍 十二月

谷 泰

●言及世界と関与(編)

平成二・三年度科学研究費成果報告論集 三月
笑いの自己言及機能——会話において生起する事例を手がかりに 谷 泰編『言及世界と関与』

科学研究費成果報告論集 三月

塚本 明

板倉重宗の居所と行動 曾我古祐の居所と行動 以心崇伝の居所と行動 徳川家康の居所と行動 藤井讓治編『近世前期政治的主要人物の居所と行動』京都大学人文科学研究所 三月

一九九三年の歴史学界——回顧と展望——日本近世(共著) 史学雑誌 一〇三編五号 五月

富永茂樹

立法者の死——政治の宗教社会学のために——

社会学評論 一七五号 一月

L'impossible groupement intermédiaire: été-automne

1791, Zinbun 28

三月

《片衆》の兆し

京都新聞 三月十一日

パリの小学校

創造する市民 三九 四月

マクドナルド

竹内実・西川長夫編『比較文化キーワード』

サイマル出版会 四月

新人間機械論

京都新聞 五月二〇日

編集後記

ンシオロジ 一二〇号 五月

涙の復活

京都新聞 八月五日

ピジン・ジャパニーズ

京都新聞 十月七日

反復強迫

京都新聞 十二月九日

書評・小岸昭著『マラーノの系譜』

GQ 二三号 十二月

富谷 至

漢武帝観の変遷——武帝の怒りをめぐって——安田二郎編

『中国における歴史認識と歴史意識の展開についての総合的

研究』 平成四・五年度科学研究費成果報告書 三月

書評・狩野直禎著『後漢政治史の研究』

史窓 五一号 三月

●ゴビに生きた男たち——李陵と蘇武——

白帝社 五月

●漢帝国の発展 『アジアの歴史と文化』一

同朋舎 五月

座談 ユーラシア史を時代区分する

古代文化 四六卷十一号 十一月

中砂明德

劉後村と南宋士人社会

東方学報 京都六六冊 三月

中世人から近世人へ——唐宋時代の士人の位置——

古代文化 四六卷二二号 十一月

狭間直樹

近現代中国人物別称データベース BESSHOU——データ項目

の再構成——(共著)

京都大学大型計算機センター広報 二七— 二月

「中国国民党第一次全国代表大会宣言」考——国民革命核心

国共合作的一个側面——中山大学学报論叢…社会科学三

〇 孫中山研究論文集 第十・十一期合刊 二月

朱執信対孫文民生主義的理解 広東省孫中山研究会編『孫中

山与亜州』国際学術討論会論文集』中山大学出版社 一〇月

A Historical Evaluation of the Three Principles of the

People, with Particular Reference to the Principle of

Livelihood, Eto Shinkichi and Harold Z. Schiffneds.

China's Republican Revolution, University of Tokyo

Press. 十一月

藤田隆則

能の多人数合唱(同音)の特質 藝能史研究 一二四号 一月

居座の歌い手は上演に必要不可欠な役であったか?

民族藝術 一〇号 四月

能に見る究極のノリ 月刊アドバタイジング 四五七号 八月

書評・平家琵琶研究会編『平家琵琶』

東洋音楽研究 五九号 八月

能舞台の切戸口の誕生と演出の變化 能 四三九号 十二月

書評・スメサースト著『アイスキュロスと世阿弥のドラマトゥルギー』 藝能史研究 一二七号 十二月

前川 和也

The management of fattened sheep (udu-niga) in Ur III Girsu-Lagash: Supplement 2 (BM 87494)

Acta Sumerologica 17 (1994).

水野 直樹

書評・이균영, 『신간회연구』 연사비평 二四号 二月

一九二〇年代日本・朝鮮・中国におけるアジア認識の一断面

——アジア民族会議をめぐる三国の論調 古屋哲夫編『近代日本のアジア認識』 京都大学人文科学研究所 三月

植民地支配の実像——渡日の背景と戦後責任 『在日朝鮮人の歴史——枚方での掘り起こしのために』

枚方市教育委員会 三月

●京都に生きる在日韓国・朝鮮人(共編著)

京都市国際交流協会 四月

解説・除勝著『獄中一九年——韓国政治犯のたたかい』

岩波書店 七月

日本の「アジア主義」と朝鮮問題

朝鮮史研究会民報 一一六号 七月

●朝鮮民衆新聞社編『写真集 朝鮮解放一年』(翻訳・解説)

新幹社 九月

光 永 雅 明

地球規模の環境保護

京都新聞 三月三日

書評・小関隆著『一八四八年——チャーターイズムとアイルランド・ナショナルリズム』

人間と社会(東京農工大学) 五号 四月
マルチメディアは人間と社会を変え得るか——M・ポスターのポストモダン論を読みこんで

月刊民放 二四一〇—一〇月

麥谷 邦夫

気と道教 別冊歴史読本(臨時増刊) 二月

多言語エディターMileを使用した検索システム

第43回研究セミナー(東洋学へのコンピューター利用) 報告集

京都大学大型計算機センター 三月

北極星と北斗七星

森 時彦 しにか 五巻七号 七月

土紗与機紗在近代中国的对抗——關於価格關係的剖析

『辛亥革命与近代中国』下冊 中華書局 三月

矢木 毅

高麗王言考 史林 七七一— 一月

安 富 歩

貨幣の自成と自壊 数理科学(サイエンス社) 三六八号 二月

国際市場と通貨価値格差 情況 第二期五巻四号 五月

模擬貨幣 現代思想 二二二ノ六号 五月

貨幣の歴史性 本山美彦編『貨幣論の再検討』

三嶺書房 三月

●森嶋通夫著『新しい一般均衡理論』(翻訳)

山室 信一 創文社 八月

満州国と戦後日本と

波 二八九号 一月

書評・梶田孝道著『統合と分裂のヨーロッパ』

熊本日日新聞 一月四日

石原莞爾—ユートピアの背理

思想の科学 二月

書評・石川好著『大議論—政治的冒険のために』

熊本日日新聞 二月二八日

民族と歴史を超えた「永世善隣」

産経新聞夕刊 三月五日

侠と狂の残響——島田虔次本・宮崎滔夫『二十三年の夢』の

触発するもの

孫文研究 一六号 三月

アジア認識の基軸

古屋哲夫編『近代日本のアジア認識』

京都大学人文科学研究所 三月

「旅と歌と」「グズ哲氏の手帳」「ある芸談」「苔と名譽」「心要

熱、頭要冷」「虹色の夢」「失われた故郷」

産経新聞夕刊 三月二六日—四月二日

書評・ドムチョクドロップ著『徳王自伝』

熊本日日新聞 四月二五日

自著を語る・「キメラ——満洲国の肖像」

京都大学新聞 五月一日

書評・蘭 信三著『満洲移民』の歴史社会学』

熊本日日新聞 五月三日

明治国家の制度と理念 岩波講座—日本通史17・近代2

岩波書店 五月

書評・石田雄、三橋猛著『日本の社会科学と差別理論』

熊本日日新聞 六月二〇日

書評・田口富久治著『近代の今日的位相』

日本人によるアジアの法政人材の育成

図書新聞 六月二五日

カシオ科学振興財団年報 八月

書評・朝日新聞戦後補償問題取材班『戦後補償とは何か』

熊本日日新聞 八月一四日

ボストンの四季と文化施設

創造する市民 四一号 十月

書評・ビン・シン著『評伝徳富蘇峰』

熊本日日新聞 十月三日

中国の変革思想と明治維新

『江戸東京自由大学』

ある数奇なる生涯——

『薄儀日記』から見えてくるもの

江戸歴史博物館 十月

書評・村川一郎著『日本の官僚』

産経新聞夕刊 十月二六日

北帰行——あるいは帰郷の痛みについて

熊本日日新聞 十一月二八日

山 本 有 造

「大東亜共栄圏」構想とその構造 古屋哲夫編『近代日本のア

ジア認識』 京都大学人文科学研究所 三月

◎両から円へ——幕末・明治前期貨幣問題研究——

ミネルヴァ書房 五月

横 手 裕

李涵虚初探 鎌田繁・森秀樹編『超越と神秘』 大明堂 三月

横 山 俊 夫

座談会・一三〇〇年へのメッセージ I (西谷瑛子・橋本和良・

深見陶治各氏と)

京都新聞 一月一日

一筆啓上

会談(財団法人竹中育英会) 四一 一月

人間・生物・時間―さまざまな時間を求めて／第二回研究会記

録 共編(田中雅一氏と)

けいはんな 一月

監修／校訂・Originality／Carpenter's Tools: They

are made from unique Japanese steel, *Sumitomo*

Quarterly, spring 1994 No. 56

三月

座談会・「外文明と内世界」をめぐって(土屋健治・川上倫逸・

白石昌也・園田英弘・弘末雅士各氏と)

総合的地域研究(京大東南アジア研究センター) 四号 三月

人間・生物・時間―さまざまな時間を求めて／第三回研究会記

録 共編(田中雅一氏と)

けいはんな 三月

共同執筆・琉球列島における宗教関係資料に関する総合調査・

総合目録編／平成四・五年度科学研究費補助金(総合A) 研

究成果報告書(代表・琉球大学 渡名喜 明) 三月

一日を二〇倍長く biohistory／生命誌 二巻一号

生命誌研究館 四月

益軒「案訓」にみる時間の揺らぎ／上昇から水平へー安定期社

会の人間学 1 毎日新聞(大阪・中国) 四月二日

Gaijin: The Forigner in Japan, in Atsushi Ueda ed.,

The Electric Geisha (Tokyo, New York & London:

Kodansha International) *筆者に無断の改変を含む 四月

海外の「日本人」のイメージ(小冊子・オムロン京都文化フォー

ラム34号)

オムロン 五月

再録・二〇〇年前の活性化案／関西を語る 関西活性化白書Ⅱ

平成六年版

関西産業活性化センター 五月

座談会・ふるまいー行動のデザイン(いとうせいこう・井上章

子・日下公人・鷺田清一各氏と) 伝統と創生フォーラム2

平安建都二二〇〇年記念協会 六月

吉田文庫の開設

京都新聞 六月八日

人間・生物・時間―さまざまな時間を求めて／第四回研究会記

録 共編(田中雅一氏と)

けいはんな 六月

監修／校訂・Things Japanese／Traditional Japanese Ju-

venile Culture: Its Continuity and Change, *Sumitomo*

Quarterly, summer 1994, No. 57

六月

談話／校訂・二二世紀都市 新たな段階(関西文化学術研究都

市特集) 日本経済新聞夕刊 七月一五日

提言／討論・京都を見る世界の目 平安宣言シンポジウム3

(安藤仁介・中野良子・諸井誠・川上倫逸各氏と)

平安建都二二〇〇年記念協会 八月

監修／校訂・Things Japanese／Tradition of Formal

Beauty in Single Combat SUMO, *Sumitomo Quarterly*,

autumn 1994, No. 58

九月

京都の伝統性／分科会報告 第十一回 '93比叡会議報告書

日本アイ・ビー・エム 十月

企画／翻訳／編集・平安会議会議記録 シンポジウムIV

一〇〇年後の政治(サー・エドワード・ヒースほか) クロー

ジングセッション第四報告

平安建都二二〇〇年記念協会 十月

雅にふく風・吉方にむく風ー節用集・大雑書の世界

武庫川女子大学生活美学研究所紀要 四号 十月
談話／校訂・鮫島尚信書簡集の発見

朝日新聞（西部）夕刊 十月十三日

●共同起草・平安宣言

平安建都一二〇〇年記念協会 十一月八日

共訳（ピーター・コニック氏と）・The Heian Declaration

平安建都一二〇〇年記念協会 十一月八日

要旨／校訂・風流の都けいはんな シンポジウム・地域と世界

と、芸術文化の未来―総合芸術センター設立をめざして 報

告2 産経新聞（大阪）十一月六日

鼎談・都市に暮らす作法（岩滝絵美子・熊倉功夫両氏と） ど

すねん DOS-neun 三号 どすねんの会 十一月二五日

発言録・伝統と創生―新しいMIYABIをデザインする／平

安建都一二〇〇年記念グラウンド・フォーラム

京都新聞 十一月二七日

監修／校訂・Things Japanese／Kaiseki Ryori Reflects

of the Seasons, Sumitomo Quarterly, winter 1994, No.

59 十二月

オタク現象と国際化 アイハウスニュース 四四

大阪国際交流センター 十二月

吉川 忠 夫

六朝士大夫の精神生活 劉俊文主編『日本学者研究中国史論著

選訳』第七卷「思想宗教」 中華書局 九三年九月

静室考 同右

姚崇宋璟論の周辺 安田二郎編『中国における歴史認識と歴史

意識の展開についての総合的研究』

平成四・五年度科学研究費成果報告書 三月

中国六朝時代における宗教の問題 思想 八三八号 四月

「中外日報」社説 二二回 一月～十一月



おもしろく読んだ本

小南 一郎

S・J・グールド『ワンダフル・ライフ——バージェス頁岩と生物進化の物語』渡辺政隆訳、一九九三年、早川書房

この書物は、生命の誕生から人間が霊長類などと名のついている現在の状況にまでつながる、生物の進化の流れが、必然の過程ではなく、進化の重要な時期には、むしろ偶然が大きく作用したであろうことを論じている。絶滅した多くの生物は、その生物自体に問題があったというよりも、この書物の訳語をそのまま用いれば、「悲運多数死」に見舞われただけのことであったと考えられるのである。こうしたグールドの考えが、現在の進化論をめぐる議論の中で、どの程度まで同意を得ているのかは知らない。ただ、我々の関心から言えば、人間の歴史の展開の中においても、必然の作用と偶然の作用とが、それぞれどれぐらいの割合を占めていたのかを、考えなおしてみるのも無意味ではないであろう。必然が九割で偶然が一割だと考える場合と、その逆だと考える場合とでは、歴史の見方がまったく異なってしまう。従来、一つの論文を書く時にも、これこれの現象があったのは、こういう条件があったからだ、その必然性を論証することを中心の柱に据えてきたのであるが、もしかすると、これこれの現象があったのは偶然そうだっただけのことだと、身も蓋もない結論を書いた方が

事実に近いという場合が、相当に多いかも知れないのである。



人

文

第四一號

一九九五年三月三十一日

京都大学人文科学研究所発行

中西印刷株式会社

非売品